

オキナワン・ヤンキー・サブカルチャーズ ——〈日本〉と沖縄の暴走族の組織原理に注目して——

打越 正行

karp@mail.goo.ne.jp

本稿は、沖縄のヤンキー若者たちの生きる〈地元〉とその組織原理の特質にもとづき、既存の下層若者文化論の拡張を試みることを目的とする。具体的には、衰退する〈日本〉の暴走族と依然として活動を継続する沖縄の暴走族という対照的な事象に着目する。その要因を沖縄で〈日本〉の暴走族を受け入れる過程で生じた2つの修正点から説明を試みた。1つ、沖縄では暴走族間の抗争がなく、共同で暴走を楽しむスタイルが確立された。これについては沖縄の暴走族にとっての〈地元〉は物語などを機軸とする〈日本〉のそれとは異なり実体的なつながりと場所を求めて集まる数少ない場所の一つであることから説明した。2つ、暴走族とギャラリーの相互行為を通じて、ニッチ的な暴走の魅力を楽しむスタイルが確立された。これについては暴走族とギャラリーの圧倒的な数と密度、そして〈地元〉の最後の砦としての位置付けから説明した。ここからは、持たざる者がなんとか生き抜く姿、そのために〈地元〉に集い限られた資源を共有する姿を確認できる。そして沖縄のヤンキー若者たちはその困難に対抗するのではなく、最低限生き抜く戦術を模索する。

これらの差異にもとづき、沖縄の下層若者にとっての〈地元〉は、〈日本〉の「地元」のような中央から離れた場所ではなく、不連続な外部であると結論付けた。そしてこの結論から下層若者文化論は外部の視点を取り込みながら拡張する必要があることを指摘した。

キーワード：沖縄、ヤンキー、〈地元〉

1 問題提起

(自分の頭のパンチパーマを指差しながら)これどうなんですかねえ？[めっちゃ気合い入ってるじゃないですか]そうっすか・・・、けど女の子にうけないんですよー。(健二 2007年5月9日夕方、八王子市内のスーパー駐車場)

健二はこの1週間後に、髪型を短髪にして薄茶のサングラスをかけ、チーマー系の少年に変わっていた。彼のこの象徴的な変化からうかがえるように、〈日本〉¹⁾の暴走族は、1970-80年代をピークにして[佐藤 1984, 1985]、その後の活動が衰退している。暴走族の数や規模は縮小し²⁾、彼ら自身も自らのファッションやスタイルを時代遅れと考えているようである。他方で、沖縄では暴走族をめぐる活動が活発である。そこでは、毎晩にわたり暴走族がゴーパチ(国道58号線)で暴走し、それを多くのギャラリーが見物している。本稿では、沖縄のヤンキー少年・少女たちの生き抜き戦術とそれが実践される場所である〈地元〉³⁾に注目して、これらの対照的な現象⁴⁾が生じる要因の説明を試み、それをもって下層若者文化論の理論的拡張を行うことを目的とする。

〈日本〉の暴走族について、宮台真司は地域共同体が空洞化することによって、そこに張り付く形で存在してきたヤンキーは終焉したと述べる[宮台 2009 : 16-9, 24]。地域共同体の空洞化は、グローバル経済による流動的な労働者へのリスクの増大や、伝統的な共同性の喪失によってもたらされた出来事として位置づけられる[Bauman 1998=2008; Giddens 1991]。

他方で、難波道士はヤンキーの1970年代頃から現在に至る系譜を辿りながら、その「生命力や居場所を確保する能力」を評価する[難波 2009 : 233]。これは伝統的コミュニティが大きく揺らぎ、解体の危機に直面しつつも、多様な形でコミュニティが存続し再創造されている現象によってもたらされた出来事として理解できる[乾 2010 : 112-3; 中西・高山 2009]。

現在の〈日本〉のヤンキーについてはデータ不足のため、双方の議論の妥当性をここで判断することはできない。ただどちらの議論も、その活動の拠点となるコミュニティへの言及は避けられない。ヤンキーの実践は彼らの生きるコミュニティの形態に方向付けられ、そのコミュニティのありようは現代社会の諸相を反映している。よって、ヤンキー若者の生き抜き戦術から現代社会のありようの一部をつかむことが可能となる。これにもとづけば、上の沖縄の暴走族、ヤンキーの若者の活発な活動を理解するためには、彼らの活動拠点としての〈地元〉へアプローチし、その動態のメカニズムを理論的に解釈する作業が有効である。沖縄と〈日本〉のヤンキーの実態には、どんな差異があるのか。またその差異はいかなる背景とプロセスによって生じているのか。それは既存の社会学理論ではどのように説明できるのか(できないのか)。その検証を通じてなされる下層若者文化論の拡張にはどのような意義があるのか。以下では、ヤンキー若者たちの生き抜き戦術をもとにして、これらの問題にアプローチしていく。

2 調査方法

本稿では2つの調査法を採用した。1つ〈日本〉の暴走族の衰退の過程に対しては過去の暴走族少年への聞き取り調査をもとに書かれた二次資料や自伝を用いた。2つ、沖縄の暴走族の持続的な活動の要因を探るためには参与観察法を用いた。それらの方法は、衰退と継続の過程で重要な役割を果たす文化の記述において、効果的である。社会構造や歴史が、ある実践を方向づけている場合でも、それが行為者の文化や意味の水準を媒介するからこそ、その過程は巧妙にかつ強固に方向づけられる。ここでも、現在の沖縄のヤンキーが展開する実践を(対抗的文化としてだけでなく)生き抜き戦術として捉える際に、この方法は有効である。

私が実施した参与観察は、沖縄をフィールドに、2007年6月から2009年6月の間の計20週間にわたり、暴走族、ギャラリーを対象に行った。ここでは合計166名の14歳から30歳までの若者（その内21名は女性）から話を聞いた。調査では、深夜から朝方にかけて暴走中の暴走族を原付バイクで追走し、コンビニなどで休憩している合間にインタビューを試みた。特定の暴走族との関係性ができてくると、直接〈地元〉へ向かい、そこで作業を手伝った後に、ゴーパチへ暴走するために移動し、その後再び〈地元〉まで一緒に帰り談笑するという彼らに張り付く形での調査を実施した。その他にも、暴走行為の見学、写真撮影やDVD編集などの活動に使いパシリ（雑用係）として加わった。

なお本調査では触法可能性のある行為も一部含まれている。例えば、調査地を移動する際に行った暴走族の追走や、深夜の未成年との談笑などである。ただ、これまでに社会学が対象としてきた社会は、彼らが生きる〈地元〉のように法に囲われた社会のみではない。そして今までも多くの社会学者が、法によらない秩序ある社会をもとに、既存の社会を批判的に考察してきた[Whyte 1993[1943]=2000]。よって、それらの社会に、厳密に順法行為のみでアプローチすることは困難である。これらをふまえ、社会学徒として調査を行う際に重要となるのは、何を明らかにするために、何を対象とし、どのような方法と立場でその問題に迫るのかについての自覚的態度につきるだろう。本稿にあてはめると、上述の目的を達成するために、仲間がいつも集まる〈地元〉の機能やそこで生き抜き戦術を対象とし、そのために深夜のコンビニ前やアジトでの参与観察と場所の移動は有効であるということになる。仲間集団に注目するのは、少年院の元教官であった加藤誠之が施設内での聞き取り調査から彼らにとっての仲間集団の重要性を指摘した論者にもとづいている[加藤 2002 : 66-7]。なお録音機による記録はその場所の雰囲気や壊すために実施せず、空き時間に行ったメモをもとにその日の調査後にフィールドノーツの作成を行った。また本稿の固有名はすべて仮名である。

3 概念定義

3.1 〈地元〉

以下で詳しくみる暴走族の衰退／継続の過程は、その若者たちが生きる地元とそこでの生き抜き戦術と関連づけて論じられるべき問題である。よってここでは都市社会学や若者文化研究におけるサブカルチャーズとコミュニティにまつわる議論を紹介し、本稿の問題関心である暴走族と〈地元〉との関連を整理する。

サブカルチャーズは、これまで都市におけるその機能に注目されてきた。なかでも初期シカゴ学派のルイス・ワース(Louis Wirth)は、人口集中を特徴とするアーバニズムが孤立や心理的苦悩や逸脱を促進させるという「都市疎外テーゼ」を提唱した[Wirth 1938=1978]。それに対して、クロード・フィッシャー(Claude S. Fischer)は都市におけるコミュニティの規模によって、サブカルチャーズは強化され多様化し普及するという「アーバニズムの下位文化理論」を提唱した[Fischer 1975=1983 : 59-69]。アーバニズムによって村落から都市へ移住した人々が都市でサブカルチャーズを強化し多様化させるという指摘は、沖縄の事例にも適用できる。村落から都市への移動と沖縄から〈日本〉への移動といった違いはあるものの、沖縄人も

大阪の大正区などに沖縄タウンを形成し、同郷ネットワークを組織してきた。そして多くの沖縄の若者もそこへ飛び込んだ。ただ沖縄の若者は、キセツ(季節労働)⁵⁾で〈日本〉の都市に移動するものの最終的には沖縄へ帰る、もしくはそれを希望することが多い⁶⁾。本稿が沖縄のヤンキーを対象とするなら、〈日本〉の都市におけるつながりの実態や生活史に加えて、沖縄の〈地元〉とそこで作りあげられるサブカルチャーズの関係にも注目する必要があるだろう。

このような関心にたつと、昨今の若者文化研究における地元への着目は示唆に富む[新谷 2002; 鈴木 2008]。鈴木謙介は「自分の出身地」や「自分の帰属先」をジモトとし、それは「地理的な境界というよりは、ある領域の中で培われた関係に基礎づけられた『物語』の位相であり、そして常に生きられることによってしか確認されないような、理念的なもの[鈴木 2008 : 211]」と説明する。鈴木とは対照的にフィル・コーエン(Phil Cohen)は、地元意識(territoriality)を通じた地元の実在性に注目する。

サブカルチャーは、共通したファッションや音楽などのライフスタイルによって、象徴的で拡散した親近感を提供するけれども、サブカルチャーそれ自体ではいかなる具体的な集団構造をも規定しない。サブカルチャーは、『地元意識』の機能を通じてこそ、若者たちの集合的現実に着着する。地元意識は単に周囲との境界と中心によって自らの集団の境界と中心を確認するための過程であり、またその過程で地元意識はサブカルチャー的価値観を備えるようになる。……このように地元意識は、若者たちが集合的営みとしてサブカルチャーを「生きる」手段であるだけでなく、サブカルチャー集団がその地元に着着するようになる手段でもある。[Cohen 1980 : 85]

彼によると、象徴的(観念的)なライフスタイルや価値規範を有するサブカルチャー集団は、地元意識を通じて実体的な地元に着着するという。本稿では鈴木が地元の物語性に注目する意図⁷⁾を理解しつつも、コーエンのように実体的な条件から物語や帰属意識がダイナミックに形成される過程に着目する。なぜなら、沖縄の暴走族、ヤンキーの若者にとっての〈地元〉とは、観念的な物語を支えるものというより、仲間と毎晩にわたり集う実体的な場所であるためである[打越 2011]。そこでは、同世代の仲間とのつながりをもとに、既存の支配的な言語、価値を固有の言語、知識、文化として読み替え、編み出してもいる[打越 2009 : 77-80]。また一部の暴走族では、そこに集う若者を〈地元〉の建築業に斡旋させる事例もある[打越 2008 : 30]。

これらを踏まえ、本稿では地元を「中学校程度の規模の集団において同世代の仲間と数年間にわたって過ごす実体的な場所」と定義する。ここで中学校程度の規模と、数年間にわたる期間を考慮したのは、新参者が社会化(例えば、先輩のシゴキや下積みにも耐えて暴走族デビューすること)されるには、その規模の集団で、その期間にわたって過ごすことにより、メンバーの代替不可能性を生じさせるために重要と考えたためである⁸⁾。

沖縄と〈日本〉の暴走族、ヤンキーの若者たちそれぞれの地元について補足しておく。両者ともに、地元は出身中学や暴走族の先輩、同輩、後輩らと集う場所であることは共通する。ただ、具体的に集う場所が〈日本〉では学校の保健室や部室、実家の自分の部屋であるのに対し、沖縄のそれは暴走族のアジトやコンビニ、マクドナルドである。些細な違いかもしれないが、

この違いは暴走族脱退時の制裁をめぐって明確になる。沖縄の暴走族では、〈日本〉の暴走族では頻繁に生じる脱退時の制裁としてのリンチ、そして所属していた暴走族を(やめさせられることはあっても)自らやめる事例は、少なくとも本調査中には確認できなかった。これは、〈日本〉の暴走族で脱退する場合は、主に家族によって学校や職場といった包摂の働きかけが準備されており、残った成員はそれに妬みを抱くのに対し、沖縄の暴走族は脱退後に行き着く場所がない(=ひとりで彷徨う)、もしくは極めて厳しい世界が待っているためである。

[最近、ユウジ見ないですけど元気してますか?]最近、音信不通。突然、倉庫にも来なくなったしよ。夜も(ゴーパーチに)出てんし、どこいるかわからんよや。松山で拉致されたか、内地に売り飛ばされたやんに(笑)。(大丈夫ですかね?)誰も知らんのは危ないよ。家行ってもわからんはずよ。(裕太 2007年11月11日、暴走族アジト)

ここからわかるように、本稿の沖縄の暴走族、ヤンキーたちの〈地元〉は、家族、学校、就労世界、地域から、社会的に排除され、再度包摂される可能性の低い若者が行き着く場所である。それは、〈日本〉の過疎化した地方の暴走族、ヤンキーたちが集う「地元」とは背景が異なる。前者は排除された若者が駆け込む場所であるのに対し、後者はそこからさえも吐き出される。ここから、沖縄の〈地元〉は過疎化する〈日本〉の中央から離れた地方の延長線上にはなく、質的に不連続な外部に位置づけられるものである⁹⁾。

また地元意識について、コーエンは上で「周囲との境界と中心によって自らの集団の境界と中心を確認するための過程」と述べているが、本稿では中心との遠近や境界の内外などの比較に拠らずに形成される地元意識に着目する。上の地元の定義によれば、地元意識は、「中学校区規模の仲間と、実体的な場所において、ある期間にわたり過ごすことを通じて形成される地元への帰属意識」と定義できる。重要なのは、この定義では地元意識が同一性、つまり比較によってではなく、いつもの仲間といつもの場所で過ごすことによる隣接性、つまり時間と場所を共有することで導かれていることである。導かれる原理が異なることによって、地元意識は、上昇志向を目指す学校的価値や、労働倫理、そして遵法精神などに影響を受けながらも、しばしばそれらを超える。例えば、地元意識を持つことにより、仕事に就いていなくとも今を楽しもうとする現在志向を抱き、また警察やメディアによる暴走族へのネガティブキャンペーンよりも地元の仲間の評価やそこで形成される価値を重視することにつながっている。

3.2 沖縄の暴走族とギャラリー

上の地元の理解にもとづき、ヤンキーを「地元意識を持ち地元生きる若者」と定義する。下層若者の多くは、学校や就労世界などから排除された結果¹⁰⁾、地元を超える高校や職場では生きていないので、ヤンキーと大きく重なる¹¹⁾。それゆえ、難波功士の指摘するように下層に位置づけられ、伝統的なジェンダー規範をまとう傾向にある[難波 2009 : 25]。またヤンキー・サブカルチャーとは、ヤンキーが生き抜くための戦術を共有する若者集団をさす。以下では、暴走族、ギャラリーの具体的な活動からヤンキー・サブカルチャーを紹介し、それぞれの関係を説明する。

3.2.1 暴走族

〈日本〉の暴走族は、1970年代中盤あたりから活動を本格的にはじめた若者サブカルチャーのひとつである。それは週末の深夜の公道で改造したバイクに乗り爆音をたてながら集団暴走を繰り返すことが主な活動であった。またそれは、都心と郊外、そして地方都市にまたがって全国的に展開され[上之 1980]、その活動は、たびたび警察や行政による統制の対象となり、その規模や活動は縮小されてきた¹²⁾。その後、〈日本〉の暴走族は、沖縄にも受け入れられた。

現在の沖縄の暴走族は主に15歳(中学卒業)から20歳前半の少年によって組織される。彼らは、〈地元〉のアジトでバイクを改造し特攻服を着て、先輩の運転手と中学やチーム名が描かれた大きな旗を持ち後部座席に乗る後輩がベアとなり、合計2・3台でゴーパチに向かう。ゴーパチに到着すると交差点でバイクのフカシ(排気音)の技術やバイクの操縦法でアピールを行う。その最中、後輩たちは交差点の封鎖を行う。パトカーが交差点に到着し取締りを始めると、徐行や逆走、そして検問突破を試みて警察を挑発する。またケツもち(先輩のバイクへのパトカーの追突を防ぐためにその後ろで徐行する後輩の役割)はパトカーの追走、追突の阻止をする。暴走行為は〈地元〉の暴走族に属する若者のみが行う。調査期間中は平日でも最低数チームが、週末には5チーム程度が暴走を行っていた。

また暴走族は〈地元〉に拠点を置いているが、その中心的な活動である暴走行為は、他の暴走族やギャラリーが集まる祝祭的空間としてのゴーパチで行う。その集合的記憶は警察との激しいやりとりやギャラリーの反応とともに語り継がれる必要があるためにゴーパチで行われるが、暴走の集合的記憶はそれぞれの〈地元〉に帰って、主に〈地元〉の仲間によって蓄積される。

[昨日は暴走したの?]もちろん、おまえどこ行ってたば?[昨日はE市行ってました。沖縄連合みななかったっすね。すれ違いですかね]だー(そうかな)。昨日、みんなでC市まで行ったらよ、いきなり(パトカーに)わーざられて(追いかけて)からに大変だったよ。昨日のはしつこかった、やっさー。D市までついてきてからよ。C市の(パトカー)はしつこいばーよ。[どこのパトカーとかわかるの?]わかるさー、パトカーの運転がうまいやつ(警官)と、そうでないやつがいるさー。[へえー、そこまでわかるん?すげえな]前回捕まえられたやついたら挑発しまくるしな(笑)[そこまでわかるん?]あたりまえさー。(良夫 2007年11月13日深夜、D市内のコンビニ駐車場)

3.2.2 ギャラリー

7年前の園田交差点は中央分離帯なくて、逆走もあたりまえだった。週末は常に(暴走族)7・8チームが出て、パトカーのガラス割ってた。赤色灯割るのはあたりまえ。昔は、ギャラリーが事故したバイクを巡査(警官)が取ろうとしたのを防いだ、今はギャラリーはただ見るだけ。(昔は)特攻服(を着て走るだけ)では目立てなかった、コール、テク(技術)で目立ってた、他には警察に立ち向かうヤツとか…。ケツもちが入って、技術が落ちた。あんなのなくてもみんな逃げた。警棒でたたかれ、ヘルメットを割られ

る、そんなのはあたりまえ。2ヶ月に1回はハメをはずさない(笑)。(ギャラリーの20歳代後半の暴走族OB 2007年10月21日深夜、浦添市内ローソン駐車場)

ギャラリーとは、深夜のゴーパーチで暴走族の見物を行う若者である。そこには学校や就労世界などから排除されたヤンキーや、暴走族予備軍である中学生たち、そして暴走族を引退した各〈地元〉の先輩などが含まれる。ギャラリーのグループは2・3名から10名程度までの規模で構成される。暴走の見物が主な目的ではあるが、実際には上の暴走族OBのように現役世代への激励やかつての暴走族への郷愁、また新参者にとっては先輩への憧れ、その他にも新たなつながりを求めたり、時間潰しであったりと動機はさまざまである。深夜のゴーパーチには久茂地、浦添仲西、牧港、園田といった暴走族の名所があるが、どこで暴走が行われるかは実際に行ってみないとわからないので、暴走族専用ウェブサイト書き込まれた情報をもとにギャラリーは小型バイク車で「ホーロー(放浪)」しながら見物を行う。平日で約20・30名、週末には平均で約100名、多い時には200名を超えるギャラリーが1つの交差点に集まる。一見するとお互いのつながりの弱い群集のようであるが、過去に何度か起きた暴動の原動力となったこともある[『琉球新報』2002. 3. 25]。

暴走族との違いは、ギャラリーの少なくない若者が〈地元〉に拠点をもっていないことである。そのため〈地元〉企業と密接な関係を持つ暴走族では行われている仕事の斡旋は、ギャラリーの間では存在しない。仮に求人誌等を介して沖縄の建築現場で働くとしても、〈地元〉の先輩の紹介でないゆえに、技術や経験を習得する猶予期間は与えられずに最初から即戦力とみなされる。その結果、継続して働くことは難しい。また沖縄を出てキセツに就く際は、契約違反などの情報や、悪徳業者などの噂も、〈地元〉とつながっていないために圧倒的に少ない。

3.2.3 小括

以上が、それぞれのグループの特徴と活動の紹介である。またそれぞれの関係を表したのが以下の表である。

この表は、複雑な事象を単純化したものであり、実際にはその境界はあいまいである。暴走族は〈地元〉に生きるヤンキーの一部である。暴走族はギャラリーなどのヤンキーと比較して、より実体的なアジトなどの場所を持ち、そこにより頻繁に集う点に特徴がある。また調査を実施した時点では沖縄に少女たちによって構成された暴走族はなかった。

表1 暴走族、ギャラリー、旧車會の基本事項

グループ	性別 (男:女)	年齢	主な活動	地元との関係	仕事
暴走族	10:0 (女子なし)	10代後半から 20代前半	暴走行爲	あり	肉体労働 無職
ギャラリー	約 7:3	10代前半から 20代後半	暴走族見物 ホーロー (放浪)	一部あり	キセツ 無職

4 オキナワン・ヤンキー・サブカルチャーズ

カミナリ族にその起源のある〈日本〉の暴走族は、その後沖縄の若者にも受け入れられた。ただその過程で、沖縄の暴走族は〈日本〉のそれを沖縄の実情に沿う形で2つの修正を施した。それは、沖縄では暴走族間の抗争をやめ、共同暴走のスタイルを確立したこと、そしてギャラリーとの相互作用を通じて、ニッチ的な暴走を楽しむスタイルを確立したことである¹³⁾。以下では、これらの修正が生じた背景を〈地元〉と関連付けながら説明していく。

4.1 抗争のない沖縄の暴走族——〈日本〉の暴走族が衰退した要因から

沖縄で〈日本〉の暴走族を受け入れる過程で生じた1つ目の修正点は、それぞれの暴走族がお互いに抗争をせずに合同で暴走する点である。これを説明するために〈日本〉のかつての暴走族における抗争の意味世界の変遷に注目する。そこでは、数千人規模の組織をつかさどるトップ(リーダー)がいて、一人で敵対チームに乗り込んで形をつけた(解決した)などの派手な伝説、そして「成り上がり」感覚などが共有されていた。当時の暴走族OBは以下のように語る。

仲間あったって、結局はみんなそれぞれひとりぼっちなのよ。いっしょに走ってるときは仲間といっしょっていう気がするもんだけど、所詮はみんなひとりぼっちさ。そいつをトコトン知ったヤツが結局はチームのなかでも幹部になっていくんだよな。[上之 1980 : 221]

このようにかつての暴走族少年は、抗争や大掛かりな集会を繰り返すなかで、組織における上昇移動をめざした。それらの活動は自尊心と充実感によって支えられていた。誕生して間もない小規模の暴走族の抗争は、トップ同士のタイマン(1対1のけんか)で勝負を決着させたと記されている。かつて暴走族であった宇梶剛士は、当時、敵対する暴走族の本部に単身乗り込み、けんかを繰り返し、最終的には2,000人規模の構成員を抱える暴走族の総長にまで上り詰めた。そして、その後の変化を以下のように述べる。

[暴走族の総長になってからは——打越追加]縄張りを取り返そうとする者や、新たにこちらの縄張りを侵略しようとする者が次々と現れた。喧嘩の規模も大きくなり、その質も地に落ちた。……恨みが恨みを呼び、僕だけでは收拾がつかないところまで、抗争は激化した。あるとき抗争を終息させようと話をもちかけられ、出かけてみると100人ほどに囲まれた。謝ることも引きさがることもできなかった僕は、殴られ、蹴られ袋叩きの目にあつた。[宇梶 2005 : 96-7]

このように、抗争を繰り返すうちにトップ同士のタイマンではなく組織の規模で決着が付き、その手段も選ばれなくなった。その結果、宇梶は暴走族をやめる。また他の暴走族OBも抗争の変遷を以下のように語る。

[ずっと以前から暴走族のチーム同士でケンカはつきものだったのかな?]いやあ、前はなかったね。昭和50年[1975年——打越追加]くらいからじゃないの。前なんか、道でよそのチームとすれ違っても何にもやらなかったもんね。まるで平気な顔してましたね。ケンカのケの字もなかったよ。みんな暴走族同士で仲間っていう気持ちが強かったんだよね、その頃は。ケンカになってきたっていうのは、結局、なかにイキがりたい[調子にのりたい——打越追加]ヤツがいるから起きてきたわけよね。どっちが先走るとか、オレのほうか目立ちたいとかさ、眼つけられたらムカッときて突っ張り合うとか、そういう単純なところからはじまったのよね、ケンカは。そうなると、チームの勢力をつけたくなるじゃないの。大きいチームになれば安心してイキがれたりするわけだから。で、どのチームもみんなそうなりたいたいからぶつかり合っちゃうことになってきたんだよね。[上之 1980 : 102]

ここからは、当初は(日本)の暴走族にも抗争はなく、暴走族としての共同意識があったようだが、だんだんと緊張関係に変化したことがうかがえる。その後は暴走と抗争を主な活動とするチームへと変遷し、上で示したように暗黙のルールにもとづくタイマン型から集団で敵チームのトップを襲撃するリンチ型の抗争を行うチームへと変化した。ここでは意味世界と組織原理にもとづいた説明を試みよう。(日本)の暴走族では、暴走だけでなく抗争も暴走族における魅力のかかなりの部分を占めていた。しかしその結果として、組織が拡大するうちに、抗争は組織の規模で決着がつくものになり、抗争は魅力的な活動の一つではなく、組織の規模によって事前に避けられるものになる。かつては抗争そのものが魅力であったにもかかわらず、抗争の結果として組織が拡大するうちに、その組織の規模によって抗争が抑止されるという逆説的な状況が生じてしまう。抗争が抑制される過程で、暴走族の組織は数千人の規模にまで拡大するが、これによって暴走族は語り継がれる伝説や成り上がりの感覚が集团的記憶や共通感覚として共有・蓄積されづらい組織となる。なぜならそれらが具体的な他者を通じて共有・蓄積されるのではなく、同じ暴走族ではあるがよく知らないメンバーや匿名のメディアへと向けに行われるようになったためである。これにより、暴走族は構成員の数やより過激な活動を展開することで、所属するチームの唯一性を際限なく追い求めるようになる。このような抗争の意味の変化をひとつの要因として、(日本)の暴走族は徐々に衰退していった。

これに対して、沖縄では暴走族間の抗争はほぼ生じていない。その一要因として沖縄で確認できた68チームの暴走族は、知り合いの知り合い程度でほとんどのチームがつながっていることがあげられる。これから、沖縄の暴走族はかつての(日本)の暴走族のような本部-支部といったツリー構造ではなく、成員の知り合いの知り合い程度でつながるリズム構造であることがわかる¹⁴⁾。

アキラ「昨日、地元で歩いてたら生意気なふーじ(雰囲気)のやつが声かけてきて、でーじうしえてる(とても調子に乗っている)んですよ、そいつ。突然前から来てからに、あいさつなしか、やー(おまえ)、くるされんどー(殴るぞ)とか言ってきて、自分そいつの

こと正体不明なんですけど。どうしたら良いですかね。やっちゃっていいですかね？」
裕太「やめとけ、Gしー(の人間)だろ。先輩同士で片つけとけ。もめたら後からなんぎなる(面倒くさくなる)からやらんけー。」

アキラ「わかりました。」

(アキラ 2010年8月12日、暴走族アジト)

このように、沖縄の暴走族は際限ない組織の強化、拡大や活動の発展によらない、現状維持を是とする組織である。なぜなら、最初に説明したように沖縄の暴走族少年らにとっては、自己アイデンティティの唯一性や物語の共有を求めることより、実体的なく(地元)がありそこに具体的な仲間と集えることが重視されるためである。繰り返しになるが、沖縄の(地元)の実体性は他に実体的に集える場所を見出すことが困難であるがゆえに、注目せざるをえないものであり、楽観的にのみ位置づけることはできない。このように抗争の意味の変化に伴い(日本)のかつての暴走族が衰退する一方で、沖縄の暴走族は抗争の魅力によらずに維持されている。つまり抗争による組織の拡大、普及に頼らない原理で魅力が構築されている。以下ではその原理を暴走族とギャラリーの相互作用にもとづいて説明する。

4.2 ニッチ的な魅力の確立——沖縄の暴走族とギャラリーの相互作用から

沖縄でなされた(日本)の暴走族への修正点の2つ目は、ニッチ的な魅力の確立である。以下ではこのことを沖縄の暴走族のひとつである琉球連合を取り上げながら確認する。以下の展開のために先取りすると、琉球連合は沖縄では珍しい組織の拡大、強化を進めてきた暴走族と位置づけられる。またそれはここ10年、沖縄で最も有名でかっこいい硬派の暴走族といわれる。警察との激しいやりとりやバイク技術などは卓越しており、暴走族雑誌に何度も掲載された。また沖縄では珍しく隣り合う2つの中学にあった2つの暴走族を統合した暴走族でもある。このような琉球連合は、他の暴走族や、暴走族情報サイトで酷評される一方で、直に琉球連合の暴走に遭遇したギャラリーには興奮して絶賛される。

琉球連合はふらー(バカ、狂っている)。(暴走族OBの伊礼さん 2007年7月5日深夜、那覇市内のローソン)

自分たちのチームも、10年後とか琉球連合みたいに名門なりたいやっさー。琉球連合はイジャー(意地のある人)のチーム(翔 2007年10月19日深夜、宜野湾市内マクドナルド駐車場)

琉球連合に対する酷評は、他の暴走族からの妬みも一部あるだろう。ただこの妬みは、上述した(日本)と沖縄の暴走族の違いから生じているようにみえる。つまり、琉球連合は暴走族雑誌への取材要請やバイク技術の習得における意欲的な態度などからみて、(抗争は行わないものの)規模を拡大していったかつての(日本)の暴走族と大きく重なる。その結果、強化、拡大を成し遂げた琉球連合の存在は、酷評するにせよ、絶賛するにせよ他の暴走族を比較する基

軸となる。

琉球連合は、上(の世代)で、10人で特攻(服)着てたよ。[普通、特攻服着るのは1チーム2・3人ぐらいっすよね?]そうそう、今は(暴走族が)特攻(服)着んの(着ない奴)もいるのによ。(和樹 2007年6月25日深夜、浦添市内のローソン)

(暴走族の数が)3年前と比べて、4分の1になった。あの頃は、琉球連合の拓哉っていうふかしのプロがいたのになあ。今(の暴走族)は技術も落ちた。(暴走族OBの健二さん 2007年7月2日深夜、那覇市の国際通り)

このように、琉球連合の伝説を知る暴走族OBたちは、それを基軸に現在の暴走族を批評する。それゆえに、他の暴走族にとって琉球連合は妬みの対象となる。琉球連合の暴走はその技術、迫力、そして警察に向かっていく態度から初めて見ても理解できる凄さがある。他方、〈地元〉の暴走族の魅力は、警察に捕まりそうで捕まらない境界を楽しむものであり、それは〈地元〉の仲間が毎晩常連のギャラリーにのみわかるものである。毎晩の暴走は暴走族専用ウェブサイトで、夕方ごろに「少年院出所記念暴走」、「キセツ逃亡前1週間連続暴走」などの予告が告知され、それをもとにギャラリーはその日の暴走を楽しむ。よって琉球連合と比べると、その他の沖縄の暴走族の暴走は地味ではあるが、わかる人にはわかるというニッチな魅力を楽しむ暴走である。

そしてこれを支えるものこそ、最初に述べた暴走族とギャラリーの圧倒的な数である。沖縄には離島／へき地を除く公立中学(68校)に暴走族チームがあり、それは他の地域と比べて特異である¹⁵⁾。また広島市では2・3年周期で新しい暴走族の参入と活動中止を繰り返していたが、沖縄では10年以上も続く暴走族が多い。基本的には〈地元〉の暴走族に〈地元〉の中学生が加入するが、多くのメンバーがキセツや矯正施設にいて活動が休止状態であるなら、隣町の暴走族に加入することもある。また暴走族雑誌『チャンプロード[笠倉出版社 2005-8]』においても、沖縄の暴走族の記事数は他の地域と比較して圧倒的に多い。これに加えて、〈地元〉がそこに行き着くプロセスからも最後の砦としての実体的な場所であるために、それらを無理に拡大、多様、普及するより、なんとか維持することに重心がおかれ、そこそこ楽しむスタイルの確立につながったと考えられる。

5 沖縄の〈地元〉からの下層若者文化論へ

ここまでヤンキーの若者が生きる〈地元〉の意味世界から、〈日本〉の暴走族が沖縄で受け入れられる過程で生じた2つの修正の背景とメカニズムをみた。1つ目の抗争がないスタイルについては、〈地元〉が観念的なアイデンティティや物語を求められてというより実体的なつながりと場所を求めて集まることから説明した。また2つ目のニッチな暴走を楽しむスタイルは、暴走族とギャラリーの圧倒的な数と〈地元〉の最後の砦としての位置づけから説明した。

ここからは、持たざる者がなんとか生き抜くために〈地元〉もしくはゴーパチに集い、限られ

た資源を将来の自己や観念的なものを求めるためではなく、とりあえず現在の実体的な場所、つながりに投資する姿であった。つまり、そこで彼らはこれらの困難に明確に対抗するというより、最低限なんとか生き抜こうとしている様子を確認できる。そして〈地元〉は、その過程を支える重要な役割を果たしていた。

現在、下層若者文化論は急速に展開する労働力の再編に対して、「階層」と「地方」の視点に注目して、調査・研究が蓄積されつつある[Kenway and Kraack 2004]。例えば、尾川満宏はある地方(中国地方)の低階層の若者が〈職人〉の物語を再構築しながら、職業的再生産がなされるプロセスを描いた[尾川 2011]。ただ本稿での議論にもとづけば、そのプロセスを支える「地元」と、沖縄の下層若者の〈地元〉は異なる。前者は不安定ではあるものの学校から就労世界への接続やそれを支える家庭の役割を確認できるのに対して、後者の沖縄では家庭や学校、地域の就労世界からも断絶しているケースが多い。それは深夜のゴーパチに集う大量の若者から確認できる。また彼らのつながり方がリゾーム状であるのは、抗争の回避といった説明に加えて、昨今の流動的な就労形態の影響が深く関わっているともいえる。個別化された大量の流動的な労働力を欲する現在の就労構造は、沖縄の下層若者の現状と適合的である。

このような違いによって、沖縄の〈地元〉は中心から離れた場所ではなく、その外部にあることを確認できる。ここでその境界は、就労世界における(3Kといわれる職種を含む)様々な職種に配置転換される若者が集う「地元」と、失職と違法就労を繰り返しながら、時々不安定就労に就く若者が集う〈地元〉との間にひかれる。言い換えれば、「地元」とは生活する人間を前提として、労働者の再生産の役割を担う場所である。他方で〈地元〉とはそこに生きる人間の生活を前提としない、労働力を留保しておくための場所である。今後はこのような外部の視点にもとづいた下層若者文化論の反省的な綜活の作業がよりいっそう求められるだろう。

6 今後の課題

本稿では、〈地元〉から溢れたギャラリーを部分的に扱ったが、その実態の把握は不十分なままである。彼・彼女らにとって〈地元〉への参入は容易なことではなく、個別化された労働力として沖縄の外の労働市場へと押し出されている。これらの若者は、〈地元〉に拠点を持たず流動的に移動ができる点で、フレキシブルな就労形態に非常に適合的である。それはかつて沖縄から大量に出稼ぎに行った若者が、部分的ではあるが経験と技術を習得して沖縄に帰った移動とはまったく異なるものである。かつての出稼ぎにおける差別の問題はもちろん看過できないが、労働者を差別的に日本の労働市場に組み込んだ出稼ぎと、労働力を配置転換するだけのキセツとの違いに注目して考察をすすめて行く必要がある。

[注]

- 1) 本稿では、沖縄人と日本人には歴史的／文化的に異なる背景があること、また両者の間にある非対称な関係に焦点を合わせるためこのように表記する。
- 2) 警察に把握された〈日本〉と沖縄の暴走族の合計は、2003年に1,251チーム(17,704人)、2007年に749チーム(10,974人)である[警視庁 2008]。チーム数、成員数ともに5年間で

約4割減少している。

- 3) 〈地元〉は沖縄のヤンキー若者たちの用語法に基づく。なお便宜的に本稿では沖縄の暴走族が集う場所を〈地元〉、〈日本〉のそれを「地元」、両者あるいは一般的に用いる場合に地元と表記する。両者の差異と関係については以下で述べる。
- 4) 厳密には本稿の議論は、現在／過去と、日本／沖縄という2つの視点による4つの領域にまたがって展開する必要がある。現在『チャンプロード[2005-2008]』への投稿元の統計をとると、沖縄と〈日本〉の地方と郊外で暴走族は活動を続けていることがわかる。しかし沖縄以外の地方や郊外については十分なデータがないため、ここでは扱えない。また過去の沖縄の暴走族についても資料が不十分なために扱えない。ただこれらを考慮しても、沖縄のヤンキーに〈地元〉という視角からアプローチするという本稿の展開に大きな問題はないと判断した。
- 5) 季節労働とは、北海道や東北地方の農家が仕事のない冬季に都会へ出稼ぎに出ることである。ただ今日の沖縄のヤンキーは、慢性的な失業状態ゆえに、季節によらず年間を通して〈日本〉で働いている。彼・彼女らは、その就労形態を「キセツ」と呼ぶ。
- 6) 沖縄の若者が沖縄に帰る背景については、谷富夫による調査／研究が詳しい[谷 1989]。
- 7) 鈴木によると、今までの地域振興策は中央からのハコモノばかりで、結果的にそれは地域を活性化させなかった。それゆえに、彼は「ジモト」の物語から実在を捉えようとする[鈴木 2006 : 101]。
- 8) 〈地元〉と代替不可能性との関連については、レヴィ＝ストロース(C. Levi-Strauss)が提示した「真正さの水準」[Levi-Strauss 1958=1972 : 409]をもとにした小田亮[2008]の議論が詳しい。また拙稿[2010]では、それらの議論を検証し〈地元〉概念の不変性とダイナミズムを指摘した。
- 9) また警察の暴走族対策も、広島では徹底的な写真撮影によるデータ集約監視型であったのに対し、沖縄では検問による車線封鎖とそこでのスティックの投擲、またパトカーによる追走と追突という実力行使型であった。広島では矯正施設へ送られることが暴走族を脱退させる契機となっていたのに対して、沖縄では暴走族間の情報交換や仲間意識の更なる強化となり暴走族の活動の温床となっていることが指摘される[『琉球新報』2010. 9. 25]。加えて、家族、学校、就労世界、地域で彼らを包摂することも困難である。
- 10) 沖縄の下層若者への学校からの排除をみる際には、階級、エスニシティ文化の錯誤だけではなく、言語にもとづく排除にも注目すべきである。彼・彼女らにとって、うちなーぐちが生活言語であるにもかかわらず、学校では日本語を教育させられ、その言語の錯誤によって排除されている点は、〈日本〉の下層若者とは異なる。
- 11) ただし、下層若者とヤンキーは完全には重ならない。例えば、大学生でも地元生活拠点をもつ者はヤンキーと本稿では位置づける。また高山智樹は、「『日本型標準』を基盤としたライフコースを展望できない人々を『層』として把握」するための概念として「ノンエリート(青年)」を提起した[中西・高山 2009 : 353]。本稿で扱う沖縄のヤンキーは、ここまで述べてきた質的差異を加えた「ノンエリート(青年)」と位置づけられる。

- 12) まず道路交通法の改正(1978年)により暴走行為への取締りが行われた。それに加えて、1990年あたりから見物する若者への取締りが開始された。
- 13) 〈日本〉と沖縄の暴走族との間には、多くの共通点はもちろん、この2点以外にも修正点はある。本稿がこの2点に注目するのは、それによって沖縄の〈地元〉から下層若者文化研究を拡張するという本稿の課題が最もクリアになるためである。
- 14) 調査中に暴走族やギャラリーの少年と見物していて、ほとんどの場合でバイクを見た瞬間にどこの誰かを言い当て、また知り合いの知り合いとしてその印象的な出来事とともに紹介してくれた。
- 15) ここでは暴走族のチーム数より、その密度が重要である。各中学にある暴走族に定期的に新参加者が加わることで、世代間のつながりを通じて文化が伝達され、また同世代の仲間がいることで緊張感が生じる。この緊張感によって一時的に仲間同士の関係が悪化、断絶することはあるが、長期的にみればほとんどが〈地元〉に再び戻る。むしろ多くのトラブルが生じることで、それらが各成員の遍歴として集合的に記憶され、〈地元〉は安定する。

【文献】

- 新谷周平, 2002, 「ストリートダンスからフリーターへ——進路選択のプロセスと下位文化の影響力」『教育社会学研究』71: pp. 151-70.
- Bauman, Z., 1998, *Work, Consumerism and the New Poor*, Cambridge: Polity Press. (= 2008, 伊藤茂記『新しい貧困——労働、消費主義、ニュープアー』青土社.)
- Cohen, P., 1980, "Subcultural Conflict and Working-class Community", S. Hall ed., *Culture, Media, Language: Working Papers in Cultural Studies*, 1972-79, Hutchinson: pp. 78-87.
- Fischer, C. S., 1975, "Toward a Subcultural Theory of Urbanism", *American Journal of Sociology* 80: pp. 1319-41. (= 1983, 奥田道大・広田康生編訳「アーバニズムの下位文化理論に向けて」『都市の理論のために——現代都市社会学の再検討』多賀出版, pp. 50-94.)
- Giddens, A., 1991, *Modernity and Self-Identity: Self and Society in the Late Modern Age*, Cambridge: Polity Press. (= 2005, 秋吉美都ほか訳『モダニティと自己アイデンティティ——後期近代における自己と社会』ハーベスト社.)
- 乾彰夫, 2010, 『〈学校から仕事へ〉の変容と若者たち——個人化・アイデンティティ・コミュニティ』青木書店.
- 笠倉出版社, 2005-2008, 『チャンプロード』笠倉出版社.
- 加藤誠之, 2002, 「非行少年にとっての『仲間の評価』の意味の解明——『世間』に関するハイデッガーの思索に基づいて」『人間関係学研究』9(1): pp. 61-70.
- 警視庁, 2008, 「警察白書(平成20年版)」(<http://www.npa.go.jp/hakusyo/h20/toukei/t3-21.pdf>, 2009.7.1).
- Kenway, J. and Kraack, A., 2004, "Reordering Work and Destablizing Masculinity", Dolby, N. and Dimitriadies, G. with Willis P. eds., *Learning to Labour in New Times*, Routledge Falmer: pp. 95-109.

- Levi-Strauss, C., 1958, *Anthropologie Structurale*, Paris: Librairie Plon. (= 1972, 荒川幾男ほか訳『構造人類学』みすず書房.)
- 宮台真司, 2009, 「ヤンキーから日本を考える」五十嵐太郎編『ヤンキー文化論序説』河出書房新社: pp. 14-31.
- 中西新太郎・高山智樹, 2009, 『ノンエリート青年の社会空間——働くこと、生きること、「大人になる」ということ』大月書店.
- 難波功士, 2009, 『ヤンキー進化論——不良文化はなぜ強い』光文社.
- 小田亮, 2008, 『『真正性の水準』について』『思想』岩波書店, 1016: pp. 297-316.
- 尾川満宏, 2011, 「地方の若者による労働世界の再構築——ローカルな社会状況の変容と労働経験の相互連関」『教育社会学研究』88: pp. 251-71.
- 佐藤郁哉, 1984, 『暴走族のエスノグラフィー』新曜社.
- , 1985, 『ヤンキー・暴走族・社会人』新曜社.
- 鈴木謙介, 2008, 『サブカル・ニッポンの新自由主義——既得権批判が若者を追い込む』筑摩書房.
- , 2006, 「〈情報〉が地域をつくる——メディアが拓くコミュニティの可能性」丸田一ほか編『地域情報化——認識と設計』NTT出版, pp. 88-108.
- 谷富夫, 1989, 『過剰都市化社会の移動世代——沖縄生活史研究』溪水社.
- 打越正行, 2008, 「仕事ないし、沖縄嫌い、人も嫌い——沖縄のヤンキーの共同性とネオリベリズム」『理論と動態』1: pp. 21-38.
- , 2009, 「植民地沖縄におけるネオリベリズムと反抗——ヤンキー・サブカルチャーズ研究序説」『部落解放』15: pp. 73-90.
- , 2010, 「〈地元〉の不変性とダイナミズム——〈地元〉周縁に生きる沖縄の下層若者から」『理論と動態』3: pp. 19-37.
- , 2011, 「沖縄の暴走族の文化継承過程と〈地元〉——パシリとしての参与観察から」『社会学論考』32: pp. 55-81.
- 上之二郎, 1980, 『ドキュメント 暴走族 PART I』二見書房.
- 宇梶剛士, 2005, 『不良品——オレは既製品じゃない!』ソフトバンクパブリッシング.
- Whyte, W. F., 1993[1943], *Street Corner Society: Fourth Edition*, Illinois, U. S. A.: The University of Chicago Press. (= 2000, 奥田道大・有里典三訳『ストリート・コーナースociety』有斐閣.)
- Wirth, L., 1938, "Urbanism as a Way of Life", *American Journal of Sociology* 44: pp. 1-24. (= 1978, 高橋勇悦訳『生活様式としてのアーバニズム』鈴木広編『都市化の社会学』誠信書房.)

(うちこし・まさゆき 首都大学東京)

【欧文要約】

Okinawan Yankee Sub-cultures:Focusing on Differences of Organizational Principal between *Japanese* and Okinawan *Bosozoku*

UCHIKOSHI, Masayuki
Tokyo Metropolitan University
karp@mail.goo.ne.jp

The purpose of this essay is to extend the arguments of contemporary underclass youth culture based on *Jimoto* in which Okinawan Yankee youth survive and its organizational principal. We focus on a contrasting phenomenon: the weakened Japanese *Bosozoku* (motorcycle gangs) and Okinawan *Bosozoku* that maintain their activities. We explain the causes of the phenomena based on two modifications arising in the process by which Japanese *Bosozoku* were accepted in Okinawa. First, in Okinawa, there is no strife, and collective joyriding has come to be established as a pastime. This differs from *Jimoto* in Japan which is created by collective narratives, *Jimoto* for the Okinawan *Bosozoku* is the last gathering place for asking material connection and place. Second, through interaction between *Bosozoku* and Gallery, joyriding was established as its own cultural niche. We explain, by analyzing figures on *Bosozoku* and Gallery and location of *Jimoto*, the final frontier. We confirm thorough these figures that those who lack the resources to survive gather *Jimoto* and share resources. Okinawan Yankee youth do not oppose the hardship conditions, but cope using minimum tactics.

Based on these differences, we conclude that *Jimoto* for the Okinawan underclass youth is not distant from the socioeconomic center of Japan, but discontinuous outside. Following this conclusion, we indicate that arguments of contemporary underclass youth culture should be extended to include outside perspectives.

Keywords: Okinawa, Yankees (Group name of youth living in local community), *Jimoto* (Local community)